

市民団体からのご意見について

第1回WTで、有料化財源活用事業関係者からのヒアリングを行ったが、まちの美化の推進及び地球温暖化対策の視点でのヒアリングを行えなかったため、それらの分野に関する取組を行っている方々に対し、事務局にて追加でヒアリングを実施した。また、同じく第1回WTでヒアリングできなかった、大学生、自治連合会、地域ごみ減についても、追加でヒアリングを行った。

【ヒアリング対象】

- 1 上賀茂環境美化推進協議会（まちの美化の推進）
（ヒアリング実施日：7月7日，場所：上賀茂環境美化推進協議会長宅）
- 2 特定非営利活動法人 気候ネットワーク（地球温暖化対策）
（ヒアリング実施日：7月5日，場所：気候ネットワーク京都事務所）
- 3 京都学生祭典実行委員会（大学生）
（ヒアリング実施日：7月7日，場所：キャンパスプラザ京都）
- 4 市原野自治連合会（自治連合会）
（ヒアリング実施日：7月6日，場所：市原野自治連合会環境委員長宅）
- 5 福西ごみ減量推進会議（地域ごみ減）
（ヒアリング実施日：7月8日，場所：洛西福西会館）

（参考）第1回WTのヒアリング主体（有料化財源活用事業関係者）からのご意見の概要

1 上賀茂環境美化推進協議会（まちの美化の推進）

取組概要 ～ 上賀茂学区における一斉清掃

○ 概 要

上賀茂学区では、春と秋の年 2 回、それぞれ 500 名、年間延べ 1,000 名による地域の一斉清掃を実施している。

※この他、北区独自の門はきにも参加している。

○ 経 過

学区スポーツ少年団が、地域児童公園での練習開始前に、ごみ拾いを行ったことをきっかけとして、地域全体の清掃活動へと広がる中で、上賀茂郷界わいが景観整備地区に指定されたことを受けて、河川美化団体や自治連合会により平成 9 年に上賀茂環境美化推進協議会が組織され、よりよい環境づくりに向けて、地域を挙げてまちの美化活動に取り組んでいる。

（１）自身の取組について

- ・ 今年 4 月の一斉清掃実施の際に、回覧板で各家庭で使用済みになった蛍光管と乾電池の持参を呼びかけたところ、多くの蛍光管と乾電池が集まり、清掃活動への参加者も以前より増加した。
また、蛍光管と乾電池の回収結果を北区の会合で報告したところ、他の学区でもそういう機運が高まっていると聞いている。
- ・ 清掃活動について言えば、取組参加のきっかけとして、ティッシュ、タオル等といったちょっとした労いの品を渡すことが重要であり、そういったきっかけで参加を重ねることで、まちの美化活動の意識を参加者に根づかせることにつながる。
- ・ 上賀茂神社の境内に、以前はテレビや自転車といった大型ごみの不法投棄があったが、去年に啓発の看板を立てたり、夜間に見回りを行ったりすることで、不法投棄が少なくなった。

（２）有料化財源の活用方法について

- ・ 竹ぼうき等の清掃用具といったような、取組に必要な備品については市から支給されており、継続していただきたい。※
※有料化財源ではない。
- ・ 取組の参加を促すインセンティブを働かせる仕組みづくりに活用してはどうか。
- ・ 4 月の清掃活動の経験から、意外と家庭に蛍光管や乾電池がねむっていることがわかったので、例えば、身近な場所に常設の回収拠点を作っていただくことも有効かもしれない（実際に検討中）。
- ・ 次回の一斉清掃では、家庭から持参してもらう回収品目を増やすことも検討したいが、手間や経費との関係も考えなければならないかもしれない。
- ・ 普段ごみを捨てる方に、資源ごみの拠点回収している場所を周知することも必要

2 特定非営利活動法人 気候ネットワーク（地球温暖化対策）

取組概要 ～ こどもエコライフチャレンジ推進事業（有料化財源活用事業）

○ 概 要

小学校での学習，こども向け環境家計簿に基づく実践とその後の振り返りを通じて，温暖化やエコライフに関する子どもの理解を深め，子どもの視点からライフスタイルを見直し，家庭へのエコライフの浸透を図る取組

○ 経 過

2005年度に常磐野小学校で試行した後，06年度には3校，07年度11校，08年度50校，直近の09年度にはさらに拡大して101校で実施
今年度は，全市立小学校 177 校で実施予定

○ 特 徴

（実践・課題解決型の学習プログラムになっていること）

学び，気づいたことを，休み期間に実践し，休み明けに振り返る，継続的な一連のプロセスを踏まえることによって，「自分で感じ，考える力」，「具体的な解決方法を生み出す力」などを育むことにつながっている。

（多様な主体が参加するプログラムであること）

NPO が中心となり，様々な立場の市民ボランティア（市民，学生，企業，行政，NPO，社会教育機関）との協働のもとで実践することによって，子どもの意識や価値観を多様性の中で育み，引き出していくとともに，多様な立場・世代の人びととの学び（担い手でもあり学び手でもある）につながっている。

（ESD につながる教育であること）

みんなが安心して暮らすことのできる持続可能な社会をつくるために必要な取り組みであり，未来へ向けた取組みに必要な力や考え方を人々が学び育む「持続可能な開発のための教育（ESD）」に通じる取り組みである。ESD は，学校を含め，地域や社会のあらゆる場で誰もが取り組むべき学習であることから，当事業は，持続可能なまち・京都の実現に向けた将来世代，現在世代の学びの場となっている。

（1）自身の取組について

- ・ 温暖化防止はもちろんのこと，リユースびんの利用，LED 電球の利用等といったごみの減量と共存する取組も学習内容に盛り込まれており，ごみの減量も含めた幅広い分野の環境学習が行える。
- ・ 他都市からもこどもエコライフチャレンジ推進事業を実施したいとの要請も多く，京都発の先進モデルとして普及するようPRしていきたい。
- ・ 子どもだけでなく，大人にも広げていくことが将来的には必要と考える。
- ・ 実施する小学校数が増加するほど，予算の制約が厳しくなっている。

（２）有料化財源の活用方法について

- ・ 温暖化対策により多く活用してもらいたい。
- ・ 持続可能な社会の構築に役立つ事業に活用してもらいたい。
- ・ 自ら考え、実行し、役割を見出せる人材の育成を推進してもらいたい（育成した人から、さらにその他の人々にも伝わらなければ意味がない。）。
- ・ 有料化財源がどのように活用されているのかが見えないので、もっとPRすることが必要
- ・ エコライフチャレンジのような環境教育事業は、拡大するほどコストがかかってしまうが、将来を見据えれば、子どもへの環境教育は非常に重要であり、今後、市民全体に普及するよう、有料化財源を活用するなどにより、事業の拡大を支援することが必要
- ・ 有料化財源の考え方は、汚染者負担の考え方と同じであり、ごみを沢山出す人から得た収入を、ごみ減量などの環境に配慮した取組を行うモチベーションを引き出すような事業に活用することが必要（思い切った副賞を与えることも必要ではないか。）
- ・ ３Ｒ施設の運営や整備に活用することについては、他の事業と同様に、必要性和費用対効果を精査した上で活用するのであれば、問題はないと思う。

（３）その他の意見

- ・ ごみ減量の必要性和市民への発信の仕方について、緊急性や危機感を上手く伝えることができていないように思える。
- ・ ごみの減量については、拡大生産者責任の考え方を踏まえ、製造者や販売者と協力した取組に力を入れるべき。
- ・ 一方向の教育の時代ではなくなってきており、参加型の双方向の教育を重視していくことが必要となっている。

3 京都学生祭典実行委員会（大学生）

取組概要 ～ 京都学生祭典実行委員会の環境活動

京都市の人口の約1割を占める学生として、まちの活性化の一助になることを願い、平成15年に京都学生祭典が始まった。住民だけでなく、大学、企業及び行政と連携して、今年で8回目を迎える。

祭典当日は、リユース食器を利用するとともに、クリーンアップ活動を実施。また、地域に愛される祭典になることを願い、祭典に参画している学生が、夏季の打ち水イベントや、地域住民と一緒に通年（毎月1回）で夜間パトロールを行うなど、地域住民との交流を深めている。

（1）有料化財源の活用方法について

- ・ 学生も、ごみの有料袋には負担を感じている。
- ・ 祭典当日にリユース食器の洗浄機をレンタルしているが、金銭的な負担が大きい。補助や機械の貸出システムがあると良い。
- ・ 日常のごみ分別の仕方が分かっていない学生は少なくない。学生の目にしっかり届くように工夫して、周知・啓発をしてもらいたい。例えば、大学内での広報版の設置やチラシの配架があると良い。

（2）その他の意見

- ・ クリーンアップ活動のとき、清掃道具を市から借りている。このような制度はもっとPRすべき。インターネットによる情報はよく利用するので、ホームページの内容をわかりやすくしてもらいたい。
- ・ ごみ減量活動の成果が目に見えればやる気がわくので、ごみ量の推移をしっかりとPRしてほしい。

4 市原野自治連合会（自治連合会）

取組概要 ～ 市原野自治連合会の環境活動

○ 概 要

市原野自治連合会内に環境委員会・リサイクル部会を設置。

ごみの分別・減量・再使用・再資源化に積極的に取り組んでおり、洛北ごみ一掃作戦や、てんぷら油回収、小型家電回収の呼び掛け等を行っている。また、河川環境、不法投棄、騒音等の調査のほか、環境に配慮した企業の施設見学及び環境関連の勉強会を行っている。

○ 経 過

市原野地域住民は有料指定袋制の導入前からごみ減量やリサイクルに熱心に取り組んでおり、平成３年（東北部クリーンセンター建設の話が持ち上がった当時）に、京都市はごみが右肩上がりで見え、焼却するのが衛生的だと説明していたが、市原野地域住民は今後ごみが減量すると予想していた。

京都市と市原野自治連合会の間で定期的に協議会を開催し、クリーンセンターのトラブル時の連絡体制構築、情報交換等を行っている。

（１）有料化財源の活用方法について

- ・ 有料化財源を、①ごみ減量・リサイクルの推進、②まちの美化の推進、③地球温暖化対策に使うのは良いことだと思う。
- ・ 「快適な生活環境」につながる事業を幅広くとらえて補助をしていただきたい。現在は有料化財源の活用事業になっていないが、緑政課が行っている京のまちなか緑化助成事業はよい取組である。
- ・ 有料化財源活用紹介パンフレットは、継続事業なのか新規事業なのかわかるようにしてほしい。継続事業は評価が書いてないと、意義がある活動かどうか判断できない。
- ・ 先進的で、且つ、家庭で利用できるような環境技術の開発に有料化財源を活用し、京都市として技術を蓄積してもらいたい。従来からある箱モノに有料化財源を用いるのは反対。
- ・ 相模原市では、粗大ごみの中から再利用ができる家具類を修理・清掃し、毎月抽選で市民の方に提供している。こういった粗大ごみのリユースの取組に活用してもらいたい。
- ・ 地域の中心になっている人をサポートしながら育てていくことが必要。市民の環境活動に対し、単に補助金を渡すだけでなく、ネックになっている部分をきめ細かくサポートすることが必要。サポートする人たちの人材バンクを作ることや、有効な情報をホームページ等で分かりやすく提供することを考えてもらいたい。
- ・ ごみ減量に取り組むだけでなく、ごみを資源として捉え、徹底的に活用することが必要。そのために有料化財源を活用してほしい。

（２）その他の意見

- ・ 環境政策局のホームページは分かりにくい。テレビや新聞等と比較して、インターネットの情報はいつでも好きな時に確認することができるので重要。会合で環境問題について話をする時、資料作成に役立つので、もっと親切で分かりやすい内容にしてほしい。
- ・ 現在のごみ量が清掃工場の炉にとって適正な量だと思えないので、足りないのであれば、周辺自治体からごみを集めることを考えると良い。
- ・ リサイクルステーションは良い試み。ただし、ホームページやパンフレットに、捨てたごみの中間処理過程、リサイクル製品について示してあればより親近感がわく。

5 福西ごみ減量推進会議（地域ごみ減）

取組概要 ～ 福西ごみ減量推進会議の環境活動

○ 概 要

福西ごみ減量推進会議は、地域女性会、自治会のメンバーを主な構成員とし、毎月のまちの美化活動、てんぷら油回収、缶のプルトップ回収等、身近に行える美化活動を行っている。

（１）有料化財源の活用方法について

- ・ まちの美化活動に必要な経費の支援や清掃道具を提供していただきたい。
- ・ 缶・びん・ペットボトルのリサイクルの推進に有料化財源を使うのは良いことだと思う。
- ・ 子どもたちに環境学習を行うのは大切なことであり、有料化財源を使ってほしい。物を大切に使うことやリサイクルがなぜ必要なのかをきちんと教えないといけない。
- ・ 環境学習にあたっては、知識のある人が教えるのが良く、そのような人材を増やすことが必要。
- ・ 環境に関して体験学習できる施設を整備してほしい。エコロジーセンターは老朽化しているように感じる。

（２）その他の意見

- ・ コミュニティ回収の時に缶は収集していないが、資源ごみの日に出すことを徹底するよう、確認し合っている。
- ・ 分別の仕方は何度も周知、確認することが大切。
- ・ 福西地域では、アルミ缶の抜き取りは見かけない。
- ・ 蛍光管の回収拠点が增多ると良い。
- ・ 家庭ごみ（燃やすごみ）の回収時間をもっと早くしてもらいたい。

(参考) 第1回WTのヒアリング主体（有料化財源活用事業関係者）からの
ご意見の概要

【コミュニティ回収制度に取り組む自治会】

- ・ コミュニティ回収制度は、町内会の活動に少しでも支援していただけることに加え、近所のコミュニケーションを深めることに役立っている。
- ・ 一番の収穫は、自らの取組が町内会の予算獲得に貢献しているということが、町の方々に「見えた」ことで、皆さんのごみ減量・リサイクルへの関心が高まったことである。
- ・ 制度の存在に三年間も気付かなかったもので、もう少し地域への周知を充実すべきではないかと思う。
- ・ 今の時代は、食の無駄が多すぎるので、無駄のない食事を心がけるよう、市民や事業者の方々に伝えることが、京都ならではの発信、運動になるのではないかと思う。
- ・ 地域の活動にインセンティブが働く施策に活用してもらいたい。
- ・ 子どもの発想は、大人の想像が及ばないすごいものがあったりするので、子どもに施策のアイデアを募集してみてもどうか。
- ・ 有料化財源の使途については、淡々と予算項目を並べて周知するだけではなく、企業のCSRレポートのように具体的に成果の理解を進めることを意識して、「見える化」、「腑に落ちる化」を図ることが重要である。
- ・ 量り売りやリユースの取組が広く利用されるよう工夫すべき。
- ・ 古いものにひと工夫して、おしゃれなものに変えて再使用する運動を推進してはどうか。女性・若い人たちを取り込む意味で、「おしゃれ」がキーワード

【京の環境みらい創生事業に取り組む企業】

- ・ 中小企業の環境技術開発に対して市の支援を受けることができたことで、発注者からの要望ではなく、独自のアイデアに沿った開発が可能となるほか、開発への他社の協力を得やすくなった。

【各区環境パートナーシップ事業に取り組む区役所及び団体】

- ・ 地域で環境イベントを行った際にアンケートを実施したところ、「エコの取組を始めようと思った」、「環境についての認識が深まった」などの感想が多くあった。
- ・ 環境イベントへの若い世代や子どもの参加を促進するためには、内容を工夫するとともに、土日開催を検討することも必要である。
- ・ 地域での自主的取組を広げるためには、資料代、会場代などが意外とバカにならないので、費用の援助をいただくことが必要である。
- ・ 市の助成メニューや手続き方法を整理して伝えて（発信して）いただきたい。
- ・ 自らも、地域の人材を掘り起こすコーディネーターの役割を果たすべく取り組んでいるが、そうしたフロンティアを支援、育成する取組をお願いしたい。

【コミュニティ型堆肥化モデル実験に取り組む自治会】

- ・ コミュニティ型堆肥化に参加することで、ごみ量が減少したり、堆肥を使うことで、自宅の畑で作った野菜の甘みが増したといった効果が得られた。
- ・ 管理している人（堆肥化装置の管理、二次発酵作業などを実施する人）が固定されており、自治会内への周知、堆肥の二次発酵作業などの苦労を一人で背負っているのが現状である。コミュニティ型堆肥化の取組を拡大するには、こうした管理人の存在が不可欠である。
- ・ 周辺地域では自宅に畑を有している割合が高いので、自宅での堆肥化におけるイノシシ被害や悪臭被害等の理由から、他の周辺地域でも参加ニーズはあると思われる。
 - ・ 周知方法を工夫できれば（奥様方に伝える工夫）、堆肥化への参加率を上げることができると思う。
- ・ 周辺地域では、日常の移動に自家用車を利用するのが一般的であることから、資源回収拠点の存在が重宝されている。

【京都市ごみ減量推進会議】

- ・ 京都市ごみ減量推進会議は、事業者の取組を積極的に応援することが可能、市民・事業者のパートナーとして協働が可能、行政の施策とも連携した取組が可能、環境活動を事業化していくことも可能といったことから、京都市のごみ減量を進める上で重要な役割を果たしうる。
- ・ 京都市ごみ減量推進会議の機能を安定して発揮するためには、ごみ減量、コーディネート力のある人材の確保、知識や経験の組織としての共有、事業のモデル化が必要である。
- ・ 意識はあるが、ノウハウがない団体を、いかに実際の活動に結びつけるかが重要である。ただし、単に補助金を交付するだけでは育たない面もある。
- ・ 地域ごみ減量推進会議については、活動をアドバイス・コーディネートしていくこと、活動モデルを増やしていくことが重要である。
- ・ 環境モデル都市として、環境分野の仕事に専念できる人を、いかに生み出し、養成するのかという視点を持って、有料化財源を活用していただきたい。